
『宇宙人山姥』【掌編・SF】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『宇宙人山姥』【掌編・SF】

【Nコード】

N5583Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

私は民俗学者、古い山姥の民話を追つてとある山にきていた……。そこで私は民話と同じく老婆と遭遇した。……そこで起きた事とは。

『宇宙人山姥』 作：山田文公社

箆笥の引き出しを開けると、そこにはぎっしりと稲穂が実っていた。それを刈り取り収穫し団子にする。

古い民話・昔話の中に出てくる一説にこのような話がでてくる。時にはいろいろの灰に実ったり、押入の長持や行李を開けると出てくるといふ類型もある。こういった古い話には何とも言えない気味の悪い内容の物が幾つかあり、その話は各地に点在して言い伝えられている。私はそう言った内容の話を集めて研究している民俗研究者である。

公にはしていないが、私は少なくともそう言った事が実際に会ったと考えている。少し以前まではUFOや宇宙人といったものを信じて居なかった私が、ある日ある童話を追ってその伝承の在る地を調べているときに不思議な体験をした。それはテレビなどで良く公開されている宇宙人と遭遇してしまったのだ。

あまりに馬鹿げていて、未だに自分でも信じられないが、しかし私はハッキリと遭遇してしまったのだ。それ以来私は民俗研究の傍らこういった関連のありそうな内容を独自に調べ歩いている。

その中でもこの箆笥の稲穂の類型は多く、もしかしたらバイオプラント的なものを実際に見た人がそのような話をし、それが民話になったのではないかと推察している。

他にも竹取物語や天女伝説、いろいろとその可能性を示唆するものは多い。私は民話や昔話の裏を探るべく、そう言った話を探して各地を歩きまわって繋がりを見つけていった。

あの箆笥の稲穂の話の元になったと思われる山に来ていた。鬱蒼とした山奥にはうっすらと霧がかかっている、不気味な雰囲気漂わ

せていた。川に沿って滝のある上流まで上っていくなか、少しずつ霧が濃くなり始めた。それは民話の中にある状況と同じものだった。そしてとうとう視界全てが白に覆われて、鼻先も見えなくなり一歩も歩けなくなってしまうた。前にも後ろにも進めずにその場で立ちつくしていると、少しずつ霧が薄らいでいき、景色が輪郭を帯びて見え始めた。

すると……先ほど見ていた景色とは違った場所が目の前に現れた。滝の麓に立てられた不自然な山小屋が現れたのだ。私は小屋に近づいていく。すると中から老婆が現れた。

「おやおや、道に迷ったのかい？」

いや、それは上手く人間の老婆に擬態してはいたが、明らかにレチャルスキー型宇宙人だった。

「ええ、道に迷ってしまったて、ところでおばあさんは一人でここに住まれているのですか？」

私の問いかけにしばらく、老婆は考え込んだ後にゆっくりと口を開いた。

「ええ、そうだよ」

私がいけると重ねて尋ねようとすると、レチャルスキー型宇宙人に特有の精神感應能力を使ったのか、追いつきを塞ぐように先に老婆は答えた。

「いろいろ不便はあるけどね、わたしやここが好きなんだよ」

そう先に答えられると、いろいろと尋ねにくくなるのを見越して答えたのだろう、私はもうそれ以上にも尋ねる事ができなくなってしまうた。

「今日は霧が深いから、うちに泊まっていきなさい」

そう老婆は言い、小屋の方を指さした。内心恐怖心もあったが、彼らの技術を、もしかしたら目の当たりに出来るかも知れないと思うと、私の心は躍った。

しかし予想とは反して、小屋の文明レベルは驚くほど低く、今日日、田舎でもこのような水準ではない。いくら擬装しているとは言

え、これは少々時代遅れだと思った。

「電気もガスも無くて一人で大変じゃないですか？」

私は五右衛門風呂に入りながら外で薪をくべている老婆に尋ねた。「そうでもないよ、昔ながらの暮らしも悪くないって、ま、いまの若い者には辛いかも知れないけどね」

やはり老婆はレチャルスキー型宇宙人かもしれない、情報に依ればレチャルスキー型宇宙人はノスタルジックな面があり、自然と共に暮らすのに強い憧憬があるとされている。

「お兄さんは山に何か用があつて来なさつたのかい？」

こちらの目的を尋ねてきた。当然ながらレチャルスキー型宇宙人にとつては口で言葉を介する必要などない。心が読める彼らには隠し事はおろか、嘘をつくことなど無意味なのだ。とはいえ正直にそれを語る事は危険とも思えたが、私は山に足を踏み入れた目的を語つた。

「この山には古くから宇宙人がおりましてね、レチャルスキー型の宇宙人だと私は考えています、その宇宙人は古くは“山姥”と呼ばれていたそうで、私はその“山姥”を探しにきたのです」

その言葉に老婆は黙りこんでしまった。やはり凶星だったようだ。私はすこし緊張して身構えたが、今のところ危害を加えるつもりは無いらしく、じゃあごゆつくりと言ひ残して去つた。

風呂から上がると、老婆は山菜などで料理を用意しておいてくれた。どれもとても美味しそうに見えたが、丁重にお断りした。なぜならどの山姥物語でも食事を食べた後は眠気に襲われるのだ。助かつた旅人は食事もそこそこに早々に眠りについて、深夜に目を覚まして事なきを得ている。

なら私もそれに習い食事を遠慮して、早々に床につくことにした。寝室は布団が既に引かれていた。

「じゃあ、どうぞごゆつくり」

布団に入り横になった私に、老婆はそう言ってふすまを閉めた。辺りが暗闇に包まれた。私は鞆から宇宙人の存在を信じるきつか

けになった一つの道具を取り出す。それは古い民話で神器とされている“神耳石”^{しんじせき}と呼ばれる物で、たまたまいろいろの人の手を渡り、私の手に渡ってきたものだ。その石もこうした山姥の民話に現れた物のひとつで、人の心の声を聞くことが出来る物だとされていた。だがしかし、私の手に渡った時点では確かに何の変哲もないただの石だった。しかしあるパワースポットと呼ばれる場所に赴いた時にその石は民話通りに、人の心の声が聞こえる品へと変じたのだ。

この存在はまだ誰にも語ってはいない。もしもこうした古い民話や神話に登場するものが、宇宙人のもたらしたオーバーテクノロジーだったとしたら、その幾つかに説明がつくのだ。

もし民話を調べている最中に宇宙人に遭遇しなかったり、こうした彼らの技術と思われる物を手にしなければ、私はそんな馬鹿げた妄想を抱き信じる事はなかっただろう。

石をそつと耳に当てた。三人ほどの会話が聞こえてきた。それは宇宙人がばれた事に対する焦りや驚きが語られていた。とはいえ、一通り驚きの言葉を語った後に、どう処分するかの話し合いへと変わっていった。まず中身は食料として喰われるらしい、外見は擬態する為に保存するか、破棄するかを争っていた。どの話の内容も恐ろしいものだった。

私は布団の中でゆっくりと着替え始めた。会話を聞いている限りではまだ気づいていなかった。問題は山を無事に下りれるかにかかっていた。民話でも山から下りる最中に大けがをしたりして、動けなくなった所を山犬や狼に喰われたりして、運良く人が通り助かったが片足や片腕を喰われた話には数多くある。

鞆をゆっくりと布団へと引き寄せた。地図をおおかた頭に叩き込み布団から起きると、彼らは起きた事に気づいた。やはりこの部屋には監視カメラが設置されていたようだ。ゆっくりふすまを開けると、そこにはいろいろの前に一人すわる老婆がいた。

「やはりお腹でもすきましたかね？」

耳に当てた石からは、全く違った会話が続いている。内容から焦

っているようだった。

「いえ、レチャルスキー星人に尋ねたい事がありました」

老婆は怪訝な顔をしたが、石から聞こえる会話の内容では、誰も
が焦っていた。

「何をいつてるのか、寝ぼけてらっしゃるのですか？」

老婆はとぼけた振りをしたが、私は構わずに耳に当てた石を口元
に当てて言った。

「お前達の会話は全て聞いた」

すると老婆の顔が青ざめた。

「その石、どこでそれを！！」

わたしは口元に笑みを浮かべた。

「やはり正体を現したな、レチャルスキー星人」

その言葉に老婆は深く俯いて肩を上下させた笑い出した。

「ヒツヒツヒツ、山姥と呼ばれて久しいけど、その名で正体を見破
られたのは初めてだよ」

そう言い顔を上げた老婆の目は真っ赤に光っていた。

「私の目はごまかせない」

老婆を指さして言った私に向けて、老婆は懐からとりだした出刃
包丁をこちらに向けた。

「ヒツヒツヒツ、ばれては仕方ないねえ」

いろりをまわりこんで老婆が近付いてくる。しかし私は悠然とし
ていた。懐から取り出した草薙の剣……神話で素戔嗚尊すさのおのみことが使ってい
た神器のひとつである剣の本物を私に手にしていた。一見するとそ
れはただのペンライト状の石にしか見えないが、実は違う。

「ヒツヒツヒツ、おや、もう諦めたのかい」

出刃包丁をもって襲いかかってきたので、私は草薙の剣を起動さ
せた。ペンライト状の石の先から赤い光りが伸びて、1メートル2
0センチ辺り（木刀や竹刀ほどの長さ）で止まり、その赤い光りが
老婆の腕を切り裂いた。出刃包丁を手にした腕が床にごろりと落ち
た。老婆はそれを驚いた顔で見ている。

「それは、ライトサーベル、何故人間がそれを……」

老婆はゆつくりと後ずさりしながら、逃げようとしていた。私はゆつくりと老婆に近付いていく。

「さあ、お前達の船に案内してもらおうか……」

私はゆつくりと老婆に近付いていく。

後日私は数多くの戦利品をリュックに詰めて山から下りてきた。

彼らの有している科学技術は人間の持つそれらを遙かに超越していた。彼らの船からは世界をひっくり返せるほどの品が大量に出てきた。しかし私が興味があるのはそんな事ではない。多くの民話や昔話、神話が事実に基づき書かれた物であることを、私はただ純粹に知りたいだけなのだ。

彼らの技術品は彼らと対抗する為に品に過ぎない。彼ら宇宙人は私にとって障害になるからだ。なぜならば自分たちよりも遙かに劣っていると思っているからで、会話など成立しない、ただ一方的に蹂躪されるのだけなのだ。

だからこうした武器や道具が必要になる。

今回の調査で山姥が宇宙人で在ることが証明された。しかしながら何故各地に山姥の民話が点在していたか、姥捨てが発祥だと思っていた頃が実に懐かしい、いまでは本説が宇宙人説なのだ。

話をして彼らから聞き出せたらいいのだが、それが叶った事は一度もない。こうして各地の山姥……宇宙人へと会いに行くなかで、いつかその事を語れる宇宙人にあえると信じて、今日も山姥のいる山へと赴くのだった。

(後書き)

お読み頂きありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5583q/>

『宇宙人山姥』【掌編・SF】

2011年2月1日00時55分発行